

JAF AE Newsletter



No. 21 (January 2007)

第 20 回全国大会 / 清泉女子大学にて開催

プ ロ グ ラ ム

日本「アジア英語」学会・第 20 回全国大会
清泉女子大学言語教育研究所・フォーラム 2006

日時： 2006 年 12 月 2 日 (土) 10:10 - 17:45

場所： 清泉女子大学 4 号館 1 階 420 教室

10:10 大会総合司会：吉川寛 (中京大学)

開会の辞：石田雅近 (清泉女子大学)

エリック・ベレント (清泉女子大学)

会長挨拶：本名信行 (青山学院大学)

10:30-11:50: パネルディスカッション

「アジア近隣諸国の言語教育政策

—21 世紀の国家戦略は如何に—

司会：大杉正明 (清泉女子大学)

パネリスト：

本名信行

(日本「アジア英語」学会会長・青山学院大学)

田中慎也 (日本言語政策学会副会長)

石田雅近 (清泉女子大学言語教育研究所所長)

11:50-12:10 会員総会

13:30-14:30 基調講演

「アジア諸国における

大学間遠隔教育の理念と実践」

中野美知子 (早稲田大学 CCDL (Center for Cross-cultural Distance Learning) 所長)

14:40-15:40 特別講演

“Research on the Intelligibility of Asian Englishes: Implications for Language Teaching and Cross-Cultural Communication”

Danilo T. Dayag (中京大学)

15:50-17:05: 研究発表

司会：日野信行 (大阪大学)

「多言語主義と日本の英語教育に関する一考察」

高垣俊之 (尾道大学)

「シンガポール英語にみられる

仮定法現在について」

長久保礼一 (名古屋大学大学院)

“What is fluency? New Ideas for Evaluating Spoken Performance”

Stephen Soresi (拓殖大学)

17:05-17:45

「ESSC の開催と展開」 (ESSC 実行委員会)

閉会の辞：橋内武 (桃山学院大学)

18:00: 懇親会 (ラファエラ・ホール)

JAF AE 全国大会レビュー

日本「アジア英語」学会

第 20 回全国大会を振り返って

橋内 武 (桃山学院大学)

第 20 回大会 (総合司会 吉川寛氏) は、石田雅近氏の開会の辞、本名信行会長の挨拶で始まった。会場校の清泉女子大学との共催でパネルディスカッションと基調講演が行われたことは、本大会に関して特筆大にすべき事柄であろう。「アジアの近隣諸国の言語教育政策—21 世紀の国家戦略は如何に」というテーマで語られた各パネリストの提言は的を突いていたが、ディスカッションの時間が乏しかったのは残念。司会は会場校の大杉正明氏。

まず、本名氏は「中国の国際コミュニケーション戦略と英語教育」と題して語った。

①「近代化と経済発展」のために英語を学び、英語で世界に発信していること (CCTV)、②近隣諸国の言語 (日本語・朝鮮語・露語) の学習を奨励し、③国外に孔子学院を開設して中国語の普及に力を入れていること—これら 3 点が現代中国の言語政策の要である。英語教育は小学 3 年 (主要都市では 1 年) から大学院まで必修で、

週 4~5 時間 (1 時間=40 分) の学習が行われる。小学校で 1,000 時間を英語学習に充て、大学卒業までに 2,000 時間が費やされる。College English Test (CET) の合格が大学卒業の要件であるという。

言語教育政策通の田中慎也氏は、日本の言語政策が国全体として一貫性をもっているものではなく、各省庁がばらばらに所管の担当範囲内のことで政策提言を行っている事実を淡々と語った。同じ文部科学省の中でも部局毎に審議会・部会毎に別々の見解と提言を出す「縄張り行政」であって、改革しようにもなかなか動きがとれないという。正に「百年河清を俟つが如し」である。グローバル化が急速に進む中で、日本の進路が気にかかる。

三番手の石田雅近氏は、特に英語教員養成制度の問題を取り上げ、現状は①英語力が保障されていないこと、②2 週間か 3 週間という教育実習は近隣諸国に比べてひどく短く、極めて安易な養成制度あることを指摘した。台湾などの例を引きながら、①高度な英語力を保障と②長期の教育実習経験が必要で、③学部卒業後、1~2 年の教育大学院課程を経てこそ、専門職としての教員養成のあるべき水準が達成されるのではないかと訴えた。

総じて、近隣諸国の言語教育政策に比べ、日本のそれは見劣りするよう思われた。

午後早々、中野美和子氏 (早稲田大学 CCDL 所長) は基調講演の講師として、「アジア諸国における大学間遠隔教育の理念と実践」というテーマを引っ提げて登壇したが、勤務校で進む教育改革 (特に発表形式の小人数英語教育) を映像で紹介することに終始した。それはそれで大いに参考になる話ではあったが、日本「アジア英語」学会の会員としては「アジア諸国」とのつながりや拡がりがいま一つ聞きたいところではあった。

特別講演の Danilo T. Dayag 氏 (中京大学) と研究発表の Stephen Soresi (拓殖大学) のみが英語で発表した。それぞれ 'intelligibility' と 'fluency' についての先行研究に自身の調査と考察を加えた優れた研究であり、いずれ論文の形で味読したいと思う。

「多言語主義と日本の英語教育に関する一考

察」と題する研究発表をした高垣俊之氏 (尾道大学) は日本社会が多言語化してきているにもかかわらず、学校教育における外国語教育に「多言語主義的視点」が欠落していることを指摘し、英語以外の外国語と多様な英語を発信・受信し得るような環境作りが必要であることを強調した。

長久保礼一氏 (名古屋大学大学院) の「シンガポール英語にみられる仮定法現在について」は、「この形式がイギリス英語、アメリカ英語のどちらの影響を受けているか? Formality と関係があるか」という問題設定であった。イギリス英語かアメリカ英語かという問題設定はどうか。フロアから大原始子氏も問うたように、シンガポール英語自身に立脚した視点があってしかるべきではないか、統語論と意味論の観点から分析しているがそれで十分か、語用論や音韻論からのアプローチも必要ではないか。このような研究を書きことばのコーパスだけを頼りにしてどこまで掘り下げられ得るか、疑問に思われた。

プログラムの最後に「ESSC の開催と展開」について ESSC 実行委員会 (竹下裕子委員長) から Extremely Short Story Competition の経過報告と ESSC を用いた研究の可能性についての提案があった。生徒・学生のみならず一般の方々も奮って応募されるよう希望する。

本大会の参加者は延べ 75 名ほど。橋内による閉会の辞の後、ラフェエラ・ホールで開かれた懇親会では溢れるほどの御馳走を前にして歓談が弾んだ。新年に幸多くあれと祈る。

パネルディスカッション

レ ビ ュ ー

アジア近隣諸国の言語教育政策

—21 世紀の国家戦略は如何に—

石田雅近 (清泉女子大学)

本名信行氏は「中国の国際コミュニケーション戦略と英語教育」というテーマに基づいて、以下の内容を中心に論じた。

中国では国際化にあたって、国際コミュニケー

ションを重要視している。英語は「近代化と経済発展」の言語として重要視され、英語学習者人口は3億から3億5千万人といわれている。「英語」は小学校から大学院まで実質的に必修科目であり、一貫した英語教育プログラムの編成が企図されている。

小学校英語教育は2001年から全市、全郡で小学3年より開始されたが、主要都市（ハルビン、北京、天津、上海、南京など）ではもっと以前から、しかも、小学校1年から行っていた。現在、一般には、小3より始まり、週4時間（1時間は40分）が基準である。時間の捻出にあたっては、「国語」を1時間削る指導をしながら、他の3時間分は各地各校の事情に合わせて自由裁量の余地を残した。

教育部は初等中等教育段階における英語科の達成基準（9レベル）を設定し、小学校卒業時はレベル2、中学校卒業時はレベル5、高等学校卒業時はレベル8、高校優等卒はレベル9と指定している。ここに英語教育の一貫性志向が見られる。教育部はこの達成目標を全国的に指示するが、その完全実行を求めるわけではなく、出来るところから進めるというやり方をとっている。

大学の「英語専攻」は人気学科のひとつである。中国の大学には英文（学）科はなく、あるのは英語（学）科（English Department）である。いろいろな大学に英語専攻がある。北京外語大学、天津外語大学、上海外語大学、西安外語大学のような外語大学、また北京大学とか黒竜江大学のような総合大学、各省の農業大学、森林大学、海産大学、貿易大学、国際金融大学等である。

重要なことは、全国に展開する大学英語科の共通カリキュラムである。教育部は1998年に「高等教育における英語専攻のためのナショナルシラバス」を公示して、一定の基準を設けた。各大学がこのナショナルシラバスに基づき学科を運営することは、外語大学、総合大学、専門大学、そして師範大学、短大を問わず、英語専攻には全国共通のプログラムがある。もちろん、各地、各大学には独自の事情を考慮する自由裁量の余地が与えられている。

英語専攻には次の3分野がある：1. 英語運用

能力〔スキルズ〕科目、2. 知識科目（言語学、語彙論、文法、文体論、英米文学、英米文化・社会、西洋文化など）、3. 専攻関連科目（外交、経済、通商、法律、経営管理、ジャーナリズム、教育、科学技術、文化論、軍事）。英語と軍事のコンビネーションなどは驚きである。中国の英語科では、英語しかできない人はこの社会に必要なという認識に立ち、英語プラス何かを強調しているのが現実である。

田中慎也氏は「国家戦略としての大学英語」の視点から、次のように論じた。

新制大学でどのような外国語教育が行われてきたかは、戦後大学基準協会が制定した「大学基準」の外国語教育の理念・位置付けと、昭和31年に施行された文部省令の「大学設置基準」及び設置基準改正の推移によってわかる。

占領時代に制定された「大学基準」における一般教育重視に対し、戦後の復興と経済発展と共に経済界から出される要望・提言に対応した「大学設置基準」の専門教育重視への傾斜は、その後の大学教育における外国語教育の位置付けの変遷や、「教養か実用か」の論争を生み出す要因となった。



ごくわずかなエリートにしか海外留学が可能でなかった経済復興期には読み書き中心の英語教育でも国益を充足したが、経済が復興し、やがて発展期になると読み書きだけでなく、聞く・話す能力を備えた英語力が求められるようになる。大学入試を頂点とした読み書き能力万能時代から、聞く・話す能力をも備えた人材が経済界から求められ、人材養成の出発点が小学校英語教育となってくる。これに拍車をかけたのが急速な国際化である。国際化対応策の中で、「大学英語」は単なる改善ではなく戦略を求められる事となり、その終着点は高等教育におけるESP(English for Specific Purposes)教育の推進、授業・教育用語、学術・研究としての英語使用という、英語力強化策の多

様化問題となる。

ESP 教育は、高等教育のこれまでの外国語教育の枠組みを二つの面で大きく揺るがすことになる。一つは、一般語学の担当教員だけでは英語教育（専門教育内容の英語が絡む）をカバーできず、専門教育担当者との連携・協力が必要となる。二つ目は、ESP 教育は、企業の現場との関連も強く、企業側のエキスパートと大学教員との連携・協力による英語教育改革推進も加速される。この二つの面は、これまでの一般語学の英語教員中心で進められてきた大学英語教育の枠組みを問い直す事になる。JABEE 問題という工学系の ESP 教育の枠組みの中にも、その問題点を垣間見る事が出来る。

更には、国際競争力強化の中で様々な国・地域の英語力強化策も一層高度化する。これは、東アジアの「大学英語」を見れば一目瞭然である。

一方において、グローバル化により、日本社会の多様化もますます進み、高等教育の二極化が進行する。そして、多様な市民社会のニーズに対応した「大学英語」も求められることとなる。リメディアル英語教育もその一つである。

大綱化以降、大学の外国語教育改革が進展したが、同時に、国家や市民社会との関連に目を向けた外国語教育を考える必要性も高まっている。

今日のような変化の激しい時代にあっては、高等教育の英語教育問題を、単に外国語教育政策の問題として考えるだけではなく、政治、経済、外交、防衛、教育、情報科学技術等の政策課題を総合的に取り込んだ、より広い枠組みの「国際コミュニケーション能力」としての「大学英語」力強化策の多様化問題を戦略的に考え、検討することが急務ではないかと思われる。

石田雅近氏は「英語教員養成と現職英語教員研修システム改革の喫緊性」というテーマにより、日本の英語教員養成の問題点と検討課題を論じた。特に、アジア近隣諸国が、その国家戦略として英語教員養成・現職英語教員研修の改革、および初等教育段階における英語教育の導入等を急加速で推進している中、わが国の言語政策は大幅に立ち後れている点を強調した。言語環境や教育制度に類似点が多いと言われている台湾の英語教育改革

を考慮しながら、以下の項目を中心に詳述した。

1. 教員養成の現状

1) 教員免許取得の要件

「教科に関する科目」の修得単位設定：英語学、英米文学、英語コミュニケーション、異文化理解各 1 単位（以上を含め計 20 単位）

2) 教育実習

① 期間： 高校 2 週間（以上）

中学 3 週間（以上）

② 単位数： 4 単位

3) 英語力

教育実習に出る学生の英語力を設定する大学：獨協大、神田外語大、玉川大等

4) 教員免許状取得までのプロセス

① 課程認定大学が教職単位取得証明書を発行

② 教育委員会が免許状を交付（無試験）

2. 英語教員養成の検討課題

1) 英語力→認定基準の設定

2) 「教科に関する科目」→英語コミュニケーション能力養成科目の充実

3) 「教職に関する科目」→小学校英語教育を視野に入れた教科教育のコンセプトの構築

4) 英語教員養成のモデルカリキュラムの策定→技能別・教材別指導技術の重視

5) 指導力→模擬授業・教壇実習の充実

6) 教育実習→期間の延長と指導体制の確立

Review of a Special Lecture



Dr. Danilo Dayag on Intelligibility:

No Stone Left Unturned

James D'Angelo, Chukyo University

The twentieth JAF AE National Conference had a rich agenda, with an impressive array of dignified speakers. After a fascinating morning panel discussion, the lineup continued unabated into the afternoon, with an excellent presentation by Waseda's Michiko Nakano, followed by Dr. Danilo T. Dayag of De La Salle University in Manila, Chukyo University visiting scholar for 2006. Dr. Dayag's topic was 'Research on the Intelligibility of Asian Englishes: Implications for Language Teaching and Cross-Cultural Communication.' In this paper he made it perfectly clear how linguistics, as a *science*, should be done. He demonstrated the tradition of thorough scholarship established by Brother Andrew Gonzales, carried on by Dr. Ma. Lourdes Bautista, and ably passed down to Dr. Dayag and his own protégées: showing why De La Salle can claim an international reputation.

Beginning with a general discussion of the topic, he opened by stating that the world has 1.125 billion English speakers (Weber '97), and is the world's most influential language, also citing a March 7, 2005 Newsweek cover story, "Not the Queen's English." He cited Taylor '91 on the non-native speaker and Kachru '92 on institutionalized varieties. Dr. Dayag stressed the importance of NNSs taking the role of *assessors* of intelligibility, with the work of Catford '50, Nelson '82 and Smith '92 in which he outlined his tripartite model of *intelligibility, comprehensibility and interpretability*. Atechi '04 has written that there are no hard and fast rules about where one category ends and where another begins on Smith's model, and this is problematic, both conceptually and empirically. Dr. Dayag also explained that English utterances do not occur in a vacuum, so intelligibility must be viewed in terms of its context. Early work by Pierce and Beekman '88, Leonard '87, as well as Hardison '03, and Bloor '06 has contributed to this understanding. Hung '02 and Nair-Venugopal '03 warn that intelligibility is not a matter of pronunciation alone, but is just as much lexical, syntactic, discorsal and cultural. It is a 'processual' phenomenon which occurs 'as it goes along,' 'as it is understood.' Communication is

reciprocal and interactive. Schlegoff points out that conversation is an ongoing process as you negotiate meaning: the bottom line being that it is not words or sounds... it is *people*, not language codes, who understand one another. In a way, this casts doubt on studies in which intelligibility is judged simply by listening to recorded speech.

Dr. Dayag then moved on to review studies on intelligibility in Asian Englishes. Early studies by Taylor '91, Eisenstein '83, and Varonis and Gass look at intelligibility with NSs as interlocutors. Smith and Rafiqzad '79, however, conducted an important experiment in which speakers from nine countries gave 10-minute speech samples, which were listened to by 1,386 participants from NNS backgrounds. Regarding intelligibility, American native speakers and Hong Kong Chinese were always among the bottom five, while Japanese were always among the top five! This experiment, in which the evaluators were not NSs, was a 'first'. Smith decisively concluded that there is no reason to insist that the performance target in the English classroom should be a Native Speaker variety.

This study was followed up by Smith and Bisozza '82 and Smith '85. The 1982 study indicated that American English was more comprehensible than Japanese or Indian, but concluded that this may have been due to prior exposure to mainly that variety. The key point was that all three studies used NNSs as evaluators. A final study which Dr. Dayag referred to was one by Bent and Bradlow '03, which looked into how one's native language may have an important effect on understanding. They developed a concept coined the 'Matched Interlanguage Speech Intelligibility Benefit' (they should have consulted Krashen for a more concise name like I + 1), to describe the phenomenon in which low proficiency L1 speakers can understand high proficiency speakers from the same L1.

Dr. Dayag then moved on to discuss his own 2006 experiment (as part of the Smith Symposium at the 2006 IAWE) in which he looked at the intelligibility of Philippine speakers. Rather few studies

have been done in this area (Aquino et al. '72, Llamzon '69). He deliberately sought out 'typical speakers' of Philippine English: not acrolectal speakers, but those who speak the mesolectal variety. He stated, "If you look at acrolectal speakers, they shift to a native-like or near-native variety so there's no issue of intelligibility." Of course, I suppose this is assuming that if American English is their model, that native-like American English is internationally intelligible: a claim which the Smith studies might refute.

The basic method Dr. Dayag used was Atechi's 'write down what you hear' test. The evaluators were two each, from each of Kachru's three circles. Five speakers were selected from a total sample of nine. The small sample size was due to the fact that the experiment was conducted over just six weeks during the summer break. The study revealed that the typical Philippine English was highly intelligible to all the evaluators (between 55% and 80%), with the lowest percent for the evaluators from the expanding circle. For Dr. Dayag, this reconfirms earlier findings, that ELT requires a rethinking of the NS model. He quotes Smith '83, that English as spoken around the world in all its variety, "is not a homogenizing factor which makes cultural differences disappear, but offers a *medium* to express and explain these differences."

Concluding his talk with the implications of this research for ELT, Dr. Dayag stressed the importance of adopting Kachru's ('92) *polymodel* approach based on pragmatism and functional realism, as opposed to traditional approaches that **privilege** the native speaker. Jenkins and Taylor have done relevant work in the area of phonology. But Dr. Dayag likes the work of Tony Hung '02 best; in the Asian context we cannot generalize about particular sounds, such as whether the fricative is voiced or voiceless, mattering most. Hung employs several guidelines for deciding whether or not to teach certain items: 1. How *useful* is the given feature? 2. How *frequent* is its occurrence? 3. How *difficult* is it to learn? 4. How *appropriate* is it to learn? (will it, or will it not, impede intelligibility?)

Finally, regarding implications for cross-cultural

communication, Dr. Dayag concluded that cultural pluralism underlies world Englishes. Each variety is a separate speech community, although they share some core features (Ma '96, Patil '06). He referred to the seminal work of John Langshaw Austin, *How to Do Things with Words*, which established the foundations of Speech Act study. Speech Acts derive their uniqueness from words. Using an example of most Asian cultures, socio-cultural norms place a high value on indirectness as being polite. Compliments are downplayed before being finally accepted.

Dr. Dayag informed us that intelligibility must be viewed as a two-way process, and that it is fundamentally linked to functional, social, contextual, discursive issues. We find ourselves all the way back at Halliday, who was after all, Kachru's mentor at Edinburgh. On behalf of JAF AE, I thank Dr. Dayag for showing us that we can confidently draw our own conclusions only after investigating (and making sense of) every relevant prior study on the subject, and for his actually performing the necessary digging to share with us such a complete study of intelligibility.

基 調 講 演 レ ビ ュ ー

アジア諸国における

大学間遠隔教育の理念と実践

中野美知子氏（早稲田大学 CCDL 所長）

東海学園大学 津田早苗

これは清泉女子大学言語教育研究所との共催により実現した基調講演である。氏は早稲田大学の教養教育改革の一環としての CCDL (Center for Cross-cultural Distance Learning) の活動内容とその目的について、主に英語教育と国際理解教育について講演された。この教育改革は、異なる学部/学部の学生達が少人数で主体的に参加できる教育を目的として実施され、具体例としては、1 クラス 4 人までの Tutorial English、地域活動プロジェクト、社会連携講座、インターンシップ、21 世紀塾、オープン教育センターなどがあげられる。

この試みは、大学を開かれた場所にするための早稲田大学の教育改革の一環で、9 ヵ年計画により実施されてきた。1 期は「情報化」、2 期は「産学連携」、3 期は「アジア太平洋地域における知の共有」と位置づけられ、中野氏は主として3 期について、学生たちに異文化を日常的に経験させる試みとして、アジアの他大学との共同授業、オンデマンド講義、遠隔教育などが、授業でどのように展開されているかを具体的にスライド、DVD 画像を用いて説明をされた。

氏の説明によると、4 名のグループからなるチュートリアル教育には 10,000 人の学生が参加している。CCDL では英語・中国語・ロシア語を共通の外国語として位置づけ、学生がディスカッションを行っている。1 例としては、アジアの学生たちが「男らしさとは？」というテーマでパワーポイントスライドを準備してテレビ会議を通じディスカッションを行った。また、専門教育の中ではワールドイングリッシュとミスコミュニケーションというテーマで中国、香港、シンガポール、日本、韓国の英語が取り上げられ研究されるなど、知識偏重から問題発見型の教育をするためのしかけが CCDL の教育の目的であると説明された。

これらの試みは更に、e-learning を中心としたカリキュラムに発展し、オーラルチャットやテキストチャットを利用した遠隔教育が実現しつつある。早稲田大学では中国福胆大学、韓国高麗大学などと Cyber University Consortium を形成している。学生は自宅からそれぞれの大学のプログラムにアクセスし、BBS に書き込みをし、教育コーチ、教員、学生同士との話しあいを通じて他大学の授業を学び、1 ヶ月に 1 回の Live Session で理解を深めている。授業の内容としては、「ジェンダーによる役割について」「テレビコマーシャルに現れた文化の違い」などが例として挙げられた。

中野氏の説明は多岐にわたり、10,000 人の学生が 4 人のグループにわかれて授業を受けることを可能にするにはどのようなシステムがあるのかなどについては説明の時間がなかったが、時代を先取りした新しい教育に取り組む早稲田大学の現状が報告された。このようにアジアの大学と連携を深める教育内容は日本「アジア英語」学会の

めざす立場と一致する点に心強さを感じると同時に、学会としてもアジアの英語について更に研究を深める意義と必要を感じた講演であった。



Bilingual Brain and English Education

Mathew Varghese, Aoyama Gakuin University

There are a lot of discussions recently in the mass media on the formation of Bilingual brain. The common attraction to this subject is originated from the fact that the people who use more than one language have better competence with their brain that they have less chance to be affected by diseases like senile dementia or Alzheimer's disease. A recent feature in the BBC based on a study made in Canada highlighted the functional efficiency of the bilingual brain, the brain function of those who use more than one language compared to the unilingual brain, the people who use only one language for all sorts of communication and also those who lacks the inherent natural ability to use more than one language. It observed that the bilingual brain is efficient and sharper than the unilingual brain. Bilingual brain has an internal ability to protect itself from psychological decline with old age.

This particular BBC program was based on a study conducted in Canada with bilinguals of Indian origin who speak both Tamil and English fluently and with other Canadians who speak only English. These volunteers were chosen from the same socio-economic back ground that all were educated to the degrees level. On to various types of tests the volunteers with the bilingual background were sharper in their response than those who are with unilingual background. The study identified that the people with bilingual proficiency show uniform brain function at all ages whereas with unilinguals, the brain function decline

with advancing age. The director of this particular study is of the opinion that early acquisition of second language would improve specific acts of cognitive functions later in life. The reason for the extra efficiency of the brain, the study concluded, is because of the possibility that the acquisition of a second language in early childhood may influence the process of the development of neuronal circuits in the brain that supports the functioning of many languages.

What is really the bilingual brain? Are there any changes in the functioning of the brain when one learns more than one language? The recent research in this field has made the following observations which, in many ways, are not conclusive, but it throws some light into the function of languages in the human brain. It also helps language teachers who like to find new methods of teaching a natural language.

We can find a few answers from the latest research in neurolinguistics on whether the bilingual speaker represent each language at different areas in the brain or one uses the same area for both the languages. One finding introduced by MIT researchers Hernandez & Bates says that when looking into the effects of brain lesions on the processing of a bilinguals two languages, brain lesion that affect one language and not the other leads to the conclusion that languages are represented in different areas of the brain. Many other studies suggest that the age at which a second language is learned may determine whether different areas are used for processing each language or they are overlapping each other. Early bilinguals seem to use overlapping areas while late bilinguals use different areas. Some other studies suggest that the late bilingual are more likely to use the same cortical areas for what the words mean but different areas for grammar and syntax.

A recent article in *Science* (June 2006) observes that highly proficient bilinguals activate the same set of brain regions irrespective of which language is presented or produced. The findings here suggest that the neural circuits for different languages are highly overlapping and interconnected but do not indicate how the brain determine or control the language in use. This

article further clarifies one of the most important aspects of bilingualism that of the control of the language in the brain functioning. The basic research for this article had found that neuropsychological aspect of the bilingual patients strongly suggest that the left caudate is involved in language control rather than language-selective semantic representation. This aspect is drawn from the observations of the case of a trilingual patient with a lesion to the white matter surrounding the left caudate of the brain. This patient had preserved comprehension in all three of her languages. Her picture naming was of 80% accuracy. However, during language production tasks, she spontaneously and involuntarily switched from one language to another. These and other findings suggest that left caudate is required to monitor and control lexical and language alternatives in production tasks.

There are no real conclusive research findings about the exact localization and lateralization of the bilinguals' two languages, but it is almost certain that special neuronal circuits are formed in the brain relating to the functioning of each language and the functioning of it is controlled by the left caudate in the brain. In this connection we can find interesting observations made by Michel Paradis, a pioneering scholar in field of bilingualism. He categorically rejects the idea that bilingual's two languages are represented in different areas in the brain. According to him both language systems are represented as distinct microanatomical subsystems located in the same anatomical areas He again reiterated the fact that these subsystems that determine the bilinguals two language are represented in four patterns.

From the point of view of English teaching, there are a lot of new inputs from these observations of the studies in neurolinguistics of bilingualism about the age at which English should be taught to students in Asian countries. The best decision should be to introduce English from the primary school with a prudent method of teaching a natural language. The studies in neurolinguistics also shows that early acquisition of a language would enable the student to acquire equal

proficiency in both the languages as there is a good chance for the right formation of bilingual patterning in the brain, in which the neurofunctional modules for phonology, morphosyntax and semantics are set in at an early age and the student need not struggle with language in the later age. One of the important aspects in this connection is the formation of computationally autonomous syntax in which a student never confuse with the structuring of two languages whereas he would be able to make correct syntactical decision implicitly.

I wish to acknowledge the efforts of our association (Japanese Association for Asian Englishes) and our Chairman Professor Nobuyuki Honna in his personal capacity to introduce English at the primary school level in the Japanese schools. It must be considered as the first creative step to identify the birth of Japanese English. Most of the contemporary studies in Bilingualism reiterate the fact that a language should be taught as a natural language, and should be separated from the sociocultural back ground in which it is originated and must be placed in the socio cultural sphere of the student, so that he acquire new knowledge through the medium of English.

We have the example of English education in India where English is taught as an Indian language placed properly in the socio-cultural context of India. In recent times a lot Indian writers received international reorganization for writing in English. The commendable contribution to Indian English, in recent times, comes from Arundati Roy for writing in the classical Indian style of telling a story from different perspectives. She received Man Booker prize for this novel, 'God of Small Things' in 1997. The Booker prize for 2006 also has won by an Indian author Kiran Desai for her novel, 'The Inheritance of Loss'. Now there are a number of writers in India who have made their name in the International literary circle for writing in English. The success of Indian English that it to be renowned as a language of India is because of the successful bilingual education practiced in that country in the post independent era.

References:

- Ahlsen, Elisabeth. (2006). *Introduction to Neuro-linguistics*. Amsterdam: John Benjamins B.V.
- Hernandez, Arturo. E., & Bates, Elizabeth. (2006). Bilingualism and the Brain. In *MIT Encyclopedia of Cognitive Sciences*. Cambridge, MA: MIT Press, 80-81. Retrieved 20/10/2006 from crl.ucsd.edu/~bates/papers/pdf/from-meiti/32-Hernandez-Bates%20MIT.pdf
- Paradis, Michel. (2004). *Neurolinguistic Theory of Bilingualism*. Amsterdam: John Benjamins B.V.

Teacher Training for Pre-service Teachers in East Asia

Chitose Asaoka, Dokkyo University

The teaching of English in Japan as well as in other EFL countries in East Asia, has been at crossroads for some time. In many regions, schools and curricula are undergoing reform, significantly challenging teacher educators across the regions as they help pre-service teacher trainees to prepare for their language classrooms. In order to address these many challenges, various changes have been tried out, as well.

For example, with the implementation of English classes at the primary-education level in some regions, teacher training for prospective teachers has been provided for the first time, for example, in Korea and Taiwan. Secondly, the length of pre-service teaching practice has been altered or changed, according to circumstances. In Korea, for instance, there has been discussion as to whether the length of practicum should be doubled from four to eight weeks. On the other hand, in Taiwan, the length was shortened from one year to six months, mainly due to the great burden on the part of the schools. In this context, teachers were supposed to supervise student teachers for extensive periods of time while working full-time with their own classes to teach. Thirdly, a certain level of the English language proficiency is now required to achieve before prospective English teachers are hired. For example, in Taiwan, prospective secondary school teachers are

required to pass the high-intermediate level of the General English Proficiency Test. Similarly, though not compulsory, the Ministry of Education, Culture, Sports and Technology states that it is preferable for prospective secondary school teachers in Japan to pass the pre-first level of the Society for Testing English Proficiency Test. Another example comes from China, where there have been various contests held across the country regarding the teaching skills of English, for both in-service and pre-service teachers. In such contexts, teachers with excellent teaching skills not only receive awards but their performances can also be accessed on the Internet at anytime.

In a nutshell, more qualified teachers with adaptable potential are urgently needed across East Asia. These teachers must have a high degree of expertise in teaching English, as well as a high-level of English language proficiency.

Although the length of pre-service teacher training in Japan has recently been extended from two to four weeks, of particular note is the renewal system of secondary teachers' licenses and the establishment of graduate schools specializing in teacher education. These possible changes seem to imply, however, that in-service teachers will have opportunities to promote and maintain their expertise. Yet such opportunities do not necessarily lead to fostering prospective teachers with the necessary expertise, which other regions of East Asia have already started to emphasize.

There needs to be more research as to what kinds of problems student teachers are most likely to face during their teacher training. Likewise, it is necessary to determine what kinds of training elements are considered to be beneficial to their development as English teachers. We should also share our wisdom and expertise in fostering prospective highly qualified English teachers across East Asia. One example of such sharing could be implemented by using digital contents on the Internet, inasmuch as highly qualified teachers are vital in any educational venue.

連載シリーズ

日本「アジア英語」学会の歴史①

河原俊昭（京都光華女子大学）

1997年7月6日は、わが国におけるアジア英語研究の歴史において、記念すべき日となった。それは、日本「アジア英語」研究会が発足して、その第1回全国大会が青山学院大学で開催された日だからである。当日は暑い日であったが、会場には、140名の聴衆が詰めかけた。好奇心から会場に足を運んだ人も多かったようであるが、従来の英語研究や英語教育のあり方に物足りなさを感じていた点は共通であったろう。聴衆はこの日の講演やシンポジウムのなりゆきを、期待をこめて待ちかまえていた。

会長の本名信行氏の挨拶のあと、鈴木孝夫氏の「和臭を恐れるな！」の特別講演があり、そのうちの二つのパネルディスカッションがあった。パネリスト達は、預言者風に熱っぽい口調で、アジアにおける英語の実情、言語政策、英語教育を語った。それらを要約すると「英語はアジアの言語である」あるいは「英語がアジアをつなぐ」ということになるだろう。

個人的なことで恐縮だが、その日、聴衆の一人だった私には「英語はアジアの言語である」という発想はまったくなかった。私にとって、電撃に打たれたと言うのはやや大げさだが、かなりインパクトの強い大会であった。私は迷わずその日のうちに会員になる手続きを済ませたのであった。聴衆の多くもそうであったろう。

この日の大会は、大成功であった。従来の英語関係の学会とはかなり異なっていたが、日本の英語界はこの研究会を受け入れることが出来るだけの成熟度を示していた。この会の主張は、当日の聴衆に十分に納得してもらえたのではないか。英字紙 *The Daily Yomiuri* や月刊『言語』でも大きくこの研究会の誕生を紹介し、この研究会の存在をアピールしてくれた。

第2回大会は、1998年1月31日に、神戸商科大学（現・兵庫県立大学）で開かれた。その時から、全国大会は年に二回、一回は関東で、もう

一回は関西で行うという慣行が確定していった。この大会の講演は本名会長の「英語の国際化と多様化」であった。寒い日であったが、多くの聴衆が来てくれた。朝日新聞が取材をして、関西版ではあるが、かなり詳しくこの大会の概要を紹介した。このことは関西地区において、学会のPRに大いに役だったと思われる。

この時から、名称が日本「アジア英語」学会へと変更された。研究会から学会への変更は会員数の増加、社会的な知名度の高まりから当然のことであった。以降、本学会はますます発展していくが、それは次号以降に述べていきたい。(続く)

Book Review



『多民族社会の言語政治学』
奥村みさ、郭 俊海、
江田優子ペギー著
ひつじ書房 2006年
ISBN: 978-4894762848
価格 2,310 円(税込)

紹介者：高橋美由紀（兵庫教育大学）

シンガポールは多言語・多民族国家であり、英語はリンガフランカとしての役割を担っている。本書は、英語教育と民族語のバイリンガル教育をはじめとする言語政策や人々の使用言語と文化的アイデンティティについて、この国の約76%をしめる華人の事例研究に焦点をあてて論じている。

第一章は 政治的要因を背景に、シンガポールの言語教育システムについてのこれまでの歴史的経緯や、現状と課題について語っている。第二章は、1800年代から現代に至るまでのシンガポールの英語史について、時代毎の言語政策と国民の対応について述べている。とりわけ、シングリッシュと揶揄されるシンガポール英語について、ルーツ、派生、言語的地位について紹介しており、シンガポリアンの言語・文化アイデンティティとして描かれている。第三章は、個々人のレベルでの言語使用の要因について、華人系の男性を事例に挙げ分析している。具体的には、彼の祖先の

ルーツ、生育歴、学歴（華語学校出身）、宗教、妻の使用言語等や、また、家庭内での話す相手、話題の内容等を挙げ、これらの要因が複雑に絡み合って、日常の使用言語の状況を織りなしていることを明らかにしている。また、大学生の男女4名に日常生活の言語使用についてインタビューし、その結果、シンガポールで話されている英語が人々のアイデンティティと深く結びついていることも明らかにしている。

第四章は、英語がリンガフランカとしての立場を担った経緯と、シンガポール大学の日本研究学科の学生280名に、本人と両親が話することができる言語、特定言語の流暢さ、ある言語を母語と考える理由、マスメディアを視聴する時の言語、宗教で祈る時の言語、小論文の分析等を通して、彼らの日常生活言語における使用状況から、英語使用がシンガポール社会の人々の文化的アイデンティティに与えている影響について論じている。そして、英語圏文化が第三世代の若者に大きく影響を与えているとしている。第五章は、華語とアイデンティティや、華語離れの状況について述べられている。

どの章も、シンガポールの言語政策の変遷とその政策に共鳴する華人社会の様子が詳細な事例研究の記述や資料で述べられており、シンガポール華人の研究をするものにとっては必読書となるであろう。



The Bridges of English Language across the World: International & Multicultural Perspectives (Book 1 & 2)

『世界の多様な英語』

竹下裕子／山岡清二／
Patricia Sippel／鈴木卓 編著
松柏社 2007年 価格 各1,995円

紹介者：鈴木夏実（東洋英和女学院大学・非）
2007年4月に出版される本書は、本学会の竹下裕子氏が中心となり、本学会長本名信行氏を始

貴重なフィールド調査の結晶であるといえよう。

本書は編著者をはじめ、ほとんどの執筆者が本学会の会員である。国際英語およびアジア英語研究への貢献に敬意を表したい。

『末延先生が作った』

1000 文英語カードゲーム』

兵庫県立大学名誉教授 末延 峯生

第1集入門1, 2 解説書

『末延先生が作った 1000 文英語カードゲーム』(Suenobu Method: Senbun Card Game)には、次のような、画期的な特徴があります。

1. 「上の句」を聞けば「下の句」が浮かび、『百人一首』の「連語」原理を応用。
2. カードを互いに組み合わせ、1000 文から数万の文へと、無限に広がる。
3. 付属の CD で、リスニング・スピーキングが強くなる。
4. ひとりでも、どこでも、英検の単語と文型が、ばっちり練習できる。

対象：

- 初めて英語に接する幼稚園・小学生のために。
- 英検の 5~3 級を受験する人たちのために。
- 英語を基礎からしっかりと学びたい、と思っている中学生・高校生のために。
- 海外旅行などで、身の回りのことを英語で表現したい方々のために。

構成：

『1000 文英語カードゲーム』は、パート 1 およびパート 2 から成っています。

パート 1 は、赤いふちのついた絵カード 50 枚、それに対応する文型カード 50 枚、CD 1 枚から成っています。“pretty flower” (きれいな + 花)、など、「形容詞 + 名詞」の連語ドリル、1000 文ドリルができるカードです。

パート 2 は、青いふちのついた絵カード 50 枚、それに対応する文型カード 50 枚、CD 1 枚から成っています。“open the door” (本を+ 読む) など、「動詞 + 名詞」の連語ドリル、1000 文ドリルができるカードです。

三大特色：

特色 1. 競争原理

『1000 文英語カードゲーム』は、英語を遊びの中で、自然に学べるように作りました。世界中の人々に共通の、“絵カード”を媒介としています。カルタ方式ですので、机上の英語からたたみの上に一挙に下ろしたものと いえます。

ことばの学習の背後には、数千、数万という文例のドリルが必要です。それをグループで競争しながら、刺激しあって取ることができます。さらに、グループでなくても、一人でも、カードを手にとってめぐりながらドリルすることもできます。このように、誰もが、いつでもどこにいても、簡単に学習ができるようにとの願いを込めて、このたび『1000 文英語カードゲーム』を開発しました。

特色 2. 「連語ドリル」

『1000 文英語カードゲーム』の第 2 番目の特色は、“連語”です。従来の英語カードのほとんどは、単語の学習に限られたものでした。しかし、ことばは一つ一つ単独に成り立っているのではありません。「花」といえば「きれい」が、「本」といえば「読む」など、そうしたことばの連なりを連想しながら、私たちはことばをどんどんと、限りなく増やしてゆくのです。

たとえば、日本に古くから伝わる『百人一首』について考えて見ましょう。『百人一首』ゲームでは、「上の句」と「下の句」が、歌の意味から深い関連性を持つため、取り手は、「上の句」が読まれると同時に「下の句」が浮かび、さっと取ることができるのです。その連想を応用して、言語心理学の立場から英語学習に応用したのが、この『1000 文英語カードゲーム』です。

この『1000 文英語カードゲーム』は、一枚のカードに「形容詞 + 名詞」、さらに「動詞 + 名詞」を結びつけ、文ができるように作成してあります。たとえば、「上の句」にあたる“pretty (きれいな)”を聞けば、「下の句」にあたる“flower (花)”を、また、“read (読む)”を聞けば“book (本)”の絵を思い浮かべて、それにあたる絵カードを取るといったものです。つまり、「下の句」から先に学んでゆくと、こんどは「上の句」を聞いただけで、さっと取れるようになるの

です。

この連想力・推理力こそが、語学学習の中で最も大切な要素なのです。この『1000 文英語カードゲーム』では、その連想・推理が一番よくできる人が勝ちとなるのです。さらにそれは「聞き取り」、「話す」という自然な順序に沿っています。

使われている単語は、日本の幼少・青年たちの言語生活において、とても重要なものばかりを厳選したものです。パート 1,2 では、約 100 の名詞、50 の形容詞、約 70 の動詞、それに副詞、代名詞、接続詞など、全部で約 250 の英単語が、互いにもっとも効率的に結び合わさって、記憶をしやすいものになっています。それは同時に、英語検定試験 (STEP) の 5~3 級の、とても頻度の最も高い単語に対応しています。そしてそれらが全部、単語、連語、句、そして文というように拡大してゆき、さまざまな組み合わせによって、ついには 2,000 以上、1 万もの文が生成されるのです。特色 3. 「1000 文ドリル」

『1000 文英語カードゲーム』の 3 番目の特色は、「1000 文ドリル」です。人間には“10 の 8 乗”倍という、天文学的な数のことばを生成することができる、といわれますが、この『1000 文英語カードゲーム』は、それをほぼ現実のものに近づけたのです。

「1000 文ドリル」は、50 枚のカードの「主部」と「述部」とを縦横無尽に組み合わせ、展開してゆきます。そこで、50 文型×50 語で、合計 2,500 近くの新しい文が生成されることとなります。たとえば、“79. Can you cut a carrot?” の文は、“Can you cook a fish?” “Can you drive a car?” など、ほとんど他の 49 の文と組み合わせることができます。つまり、「基本 50 文型」×「カード 50 枚」で、最低 2,500 の新しい文が生成できるということです。そして、さらに副詞句やイディオムを含む他の文型をかければ、数万に至る文を生成することができるのです。

使用されている文型は、パート 1 では、中学の英語検定教科書の第 2 学年までの文型がほぼすべて含まれています。パート 2 の「1000 文ドリル」および「追加ドリル」では、50 枚すべて

のカードに、英検 5~3 級までの文型がほぼすべて含まれています。そしてさらには、大学受験のあらゆる文型にも対応できるように、作成してあります。

さらに、付属の CD を使うことで、英検一次のリスニング試験、二次の面接試験では、音声学習の成果が大いに発揮できます。ですから、英検を受けようとしている人たちには、まさにうってつけの教材です。

このように、連語とともに、文の組み合わせ方が何千もあり、自分で自由に組み合わせながら、新しい文をどんどんと生成できるので、学習者の創造力をさらに伸ばすことができます。これこそが『1000 文英語カードゲーム』の最大の特徴です。これは、今までの英語指導技術では、ほとんど不可能なことでした。組み合わせ方によっては、とんでもない奇抜な表現ができてしまいますが、指導者がこれを単に否定するのではなく、むしろうまく活用していただきたいのです。

この『1000 文英語カードゲーム』は、すでに 5 歳の幼児から、小・中・高校生にいたるまで、長期間の実験を重ねてできあがったものです。面白いことに、どの段階でも、みな楽しく真剣になって取ります。真剣になりすぎて、時にはけんかにもなりますが、やっているうちに仲良く、譲り合いの精神も培われます。そして、驚くことに、中には 5 歳の子供でさえ、たった一時間ぐらいで、ほとんどのカードを取ってしまう子もいるのです。

ことばというのは、そのような環境の中で、自然に育まれるものなのです。それには組み合わせが命です。いいものが見つければ教えてください。そして、どうか思う存分、楽しく遊びながら、自然に学んでいただきたいと思います。そのためには、教える側がまず、先に楽しんでもらいたいのです。今後発売予定のパート 3、4、5 では、より高度な、さまざまな文が無限に作られてゆきます。ご期待ください。

事務局からのお知らせ

1. 次大会について

次大会は 6 月 30 日(土)に京都光華女子大学

(京都市右京区西京極葛野町) で開催いたします。
大会実行委員長は河原俊昭理事です。

2. 住所変更について

学会からの送付物はメール便(海外会員へは航空便)を利用しておりますので、郵便局へ住所変更届を出されていても転送されない場合があります。ご住所に変更があり次第、事務局までご連絡ください。

第21回全国大会研究発表者募集

第21回全国大会(2007年6月30日(土)、京都光華女子大学)で研究発表を希望される方は、発表要旨(日・英どちらか)をWORD1枚にまとめ、4月27日(金)まで大会担当理事の榎木蘭まで電子メールにてお送りください。

htenokizono@yahoo.co.jp

CALL FOR PAPERS

for the 21st National Conference on June 30th, 2007 at Kyoto Koka Women's University
The conference committee invites submission of abstracts of papers. Submission is accepted only by e-mail. Please write a 1-page abstract with MS WORD and e-mail it to Professor Enokizono at [htenokizono@yahoo.co.jp]. The deadline is Friday, April 27th, 2007.

ニュースレター編集担当より

今回の JAF AE ニュースレター22号は、7月下旬発行予定です。会員の皆様から記事を募集致します。国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ情報・画像、海外の新聞記事紹介など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、800~1,200字程度で奮って投稿下さい。画像なども是非ご投稿ください。

自分が知っているだけではもったいない、是非誰かと情報を共有したい、そんな情報をお持ちのあなた。どうかこの機会を通じてシェアして下さい。毎号、3件以上を目標に集めたいと思います。ご協力お願い致します。

書いてみようというご意志がありましたら、6月下旬までに編集担当(相川, aikawa@nnc.or.jp)までお知らせください。

国際会議情報(アジア周辺)

English Language Teachers' Association of India,

"English for Today and Tomorrow"

Date: February 9-10, 2007

Place: Chennai, India,

E-mail eltai_india@yahoo.co.in

Web site <http://www.eltai.org>

3rd CamTESOL Conference on English Language Teaching,

"Internationalising ELT"

Date: February 24-25, 2007

Place: Royal University of Phnom Penh (RUPP),
Confederation de la Russie Blvd.,
Phnom Penh, Cambodia.

E-mail info@camtesol.org

Web site <http://www.camtesol.org>

9th International Conference and Workshop on TEFL and Applied Linguistics, "Integrating English and Applied Linguistics into an Interdisciplinary Area"

Date: March 15-17, 2007

Place: Ming Chuan University, Taiwan, ROC.

Contact: Muse Lin, Conference Assistant,

The Department of Applied English,

Ming Chuan U., 5 Te-Ming Rd.,

Ta-Tung Village, Kuei-Shan,

Taoyuan County, R.O.C.

E-mail amiaio629@yahoo.com.tw

Web site

<http://www.mcu.edu.tw/department/app-Lang/english/frame/index2.html>

TESOL Arabia,

"Celebrating Best Practice in English Language Teaching"

Date: March 15-17, 2007

Dubai, United Arab Emirates.

Web site:

<http://tesolarabia.org/conference/index.php>

**Qatar TESOL,
"Challenges and Solutions in ELT"**

Date: April 13-14, 2007

Place: College of the North Atlantic, Doha, Qatar

E-mail jhoelker@gmail.com

Web site <http://www.qatartesol.org>

**The 5th International Conference on ELT in
China & the 1st Congress of Chinese
Applied Linguistics**

**"Language, Education, and Society in the
Digital Age"**

Date: May 16-21, 2007

Place: FLTRP International Convention Center,
Beijing, People's Republic of China.

Contact: China English Language Education
Association

E-mail celea@fltrp.com

Web site

<http://www.celea.org.cn/english/5celea.asp>

CELC Symposium 2007

**"The English Language Teaching and
Learning Landscape: Continuity,
Innovation and Diversity"**

Date: May 30 - June 1, 2007

Place: Hilton Hotel, Singapore.

Contact: Centre for English Language

Communication, National University of Singapore,

E-mail symposiumsec@nus.edu.sg

Web site <http://www.nus.edu.sg/celc/symposium>

JALT CALL,

"CALL: Integration or Disintegration?"

Date: June 1-3, 2007

Place: Waseda University, Tokyo, Japan

Web site <http://jaltcall.org>

**AMEP National Conference 2007,
"Changing Identity: Changing Needs"**

Date: October 4-6, 2007

Place: Mooloolaba Centre, Sunshine Coast

Institute of TAFE, Queensland, Australia.

E-mail amep@nceltr.mq.edu.au

Web site

<http://www.nceltr.mq.edu.au/conference/index.html>

**The Independent Learning Association
Japan 2007 Conference**

"Learner Autonomy Across the Disciplines"

Date: October 5-8, 2007

Place: Kanda University of International Studies,
Chiba, Japan

E-mail garold-murray@aiu.ac.jp

Web site <http://www.independentlearning.org>

【編集後記】

原稿が集まらないと心配しましたが、16頁にまで膨れあがりました。本号から、日本「アジア英語」学会の歴史を連載シリーズでお届けします。10周年を迎えて、ここで一度、我々の学会がどういう道を歩んできたのかを、読者の皆様と一緒に振り返ってみたいと思います。著者は、学会の「アーカイブ」担当理事の河原俊昭先生です。

2007年1月20日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

印刷 (有)すずぎ印刷

事務局

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25

白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550

E-mail: tina2@gol.com

学会ホームページ: <http://www.jafae.org>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Prof. Hiroko Tina Tajima

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi,

Tokyo 182-8525 JAPAN

FAX: 03-3326-4550

E-mail: tina2@gol.com

JAF AE's homepage: <http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239